

昨今の社会はめまぐるしく変化し、人々の生活や健康問題にも大きな影響を与えています。従来の生活では見ることのできなかった健康問題が次々に生じ、超高齢社会における人々の生活や支援システムにも変更が求められています。

このような社会構造的な変化の中にあって、医療や看護も従来の考え方や働き方を踏襲しているわけにはいきません。看護の分野においては、従来はともすると従属的になりがちであり方でしたが、近年は責任ある医療の担い手として認められたことや、訪問看護師として独立して事業を展開できるような専門職に成長してきたことが挙げられます。これからの看護職者には、看護を漫然と提供し続けるのではなく、独立した専門職として、利用者の生活の質を向上させるために、新たに生じてくる健康問題やサービス提供上の課題を発見し、その要因を分析し、それらの解決策つまり療養生活支援法を編み出していくことが期待されており、そこに研究能力という知の創造力が求められています。

一方、看護系大学は増加し、研究者を育成する大学院博士後期課程も増加し、毎年100人を超える博士号保持看護職者が輩出される状況となってきた現在、看護学分野においても研究と実践の分化が実現できるようになってきました。そこで、実践現場にいる看護職者に求められる研究力について考えてみますと、まず全員が研究を理解し、研究成果を実践に取り入れる研究力をもっていることが大切です。ついで実践現場の研究課題を発見し、あるいは研究者が発見した課題について、研究者と協力して知を創造する過程を共有し効果的に研究を発展させること、そして実践者ではあるが研究者としての研究能力も発揮できる人材であることなどのパターンが考えられます。

本書は、看護職者の養成という基礎課程における看護研究力をいかに身に付けるか、同時に基礎課程の最終段階において、一人ひとりの看護職者が自身のこれまでの学習成果を再確認し、それらを統合させる力を養うこと、研究過程やその成果を理解し自身の力として実践に生かす力を学習すること、さらに今後の実践を蓄積し発展させていく力を養うために、少数の対象をじっくりと観察し、その結果をまとめる方法を学習できる事例研究に焦点をしばって編集しました。事例研究に関する教科書が少なかったという理由もあります。

現在は実践の根拠として、医療統計学の手法に則った研究成果が重要視されています。このことを否定はしませんが、一人ひとりの対象者に深く支援する看護実践としては、対象者の生活の質をきちんと理解し、働きかけられなくてはなり

ません。事例研究は、質的な研究方法として看護実践においては重要かつ不可欠な価値をもっているものです。また、事例研究は取りつきやすいので簡単だと考えられているようですが、実は奥深い内容をもっています。それは一人ひとりの人生、生活が奥深い内容や意味をもっているからにはかなりません。それをきちんと読み取っていく力は自身の生活態度や蓄積にもよってきますが、若いからこそ読み取れるものもあります。

研究課題の追究は、事例研究だけでなく、たくさんの研究手法によって可能になります。各種の研究法を学んでじっくり取り組み、今後の実践者としての職業生活を実り豊かにしていただければ幸いです。

川村佐和子